

特67

329

今こそ
 雲の
 影を
 のぞき
 みる
 浦風



静
 三保の浦風
 三篇

廣告

男女交合秘訣

初篇發兌定價十二錢郵稅二錢右郵便
切手御送り被下候テモ不苦必ス前命
ヲ要ス

右は衛生上交合の秘訣と論じたる書にして世
の男女たる者一日も欠くべからざるの書なれ
ば江湖の諸君競ては購覽あらんと冀ふ

近世俠客傳

前編發兌
定價十三錢

右は近來京都にて高名の會津小鉄の物語と面
白く書綴りし繪入の讀本にして幼婦方の潤
覽至極宜し陸續に注文と冀ふ

京都寺町御池下ル

發兌元 叢誌屋本店

明治十六年五月九日御届
明治十六年六月 出版

校閱 石堂 情史

編輯兼 内藤 久人

京都府上京區第三十組下
本館寺前町卅六番戸寄留

○定價六錢、全部五册前金貳拾五錢

京都寺町通御池下ル

駿々堂本店

西京發賣所

東京木挽町壹丁目六番地

萬字堂本店

東京發兌元

大坂備後町四丁目

岡島支店

大坂發兌元

東京通三丁目丸屋鉄次郎

特別賣捌所 函館地瀨町 田中兵太郎

大坂唐物町 兎屋支店

大津西今風町 駿々堂支店

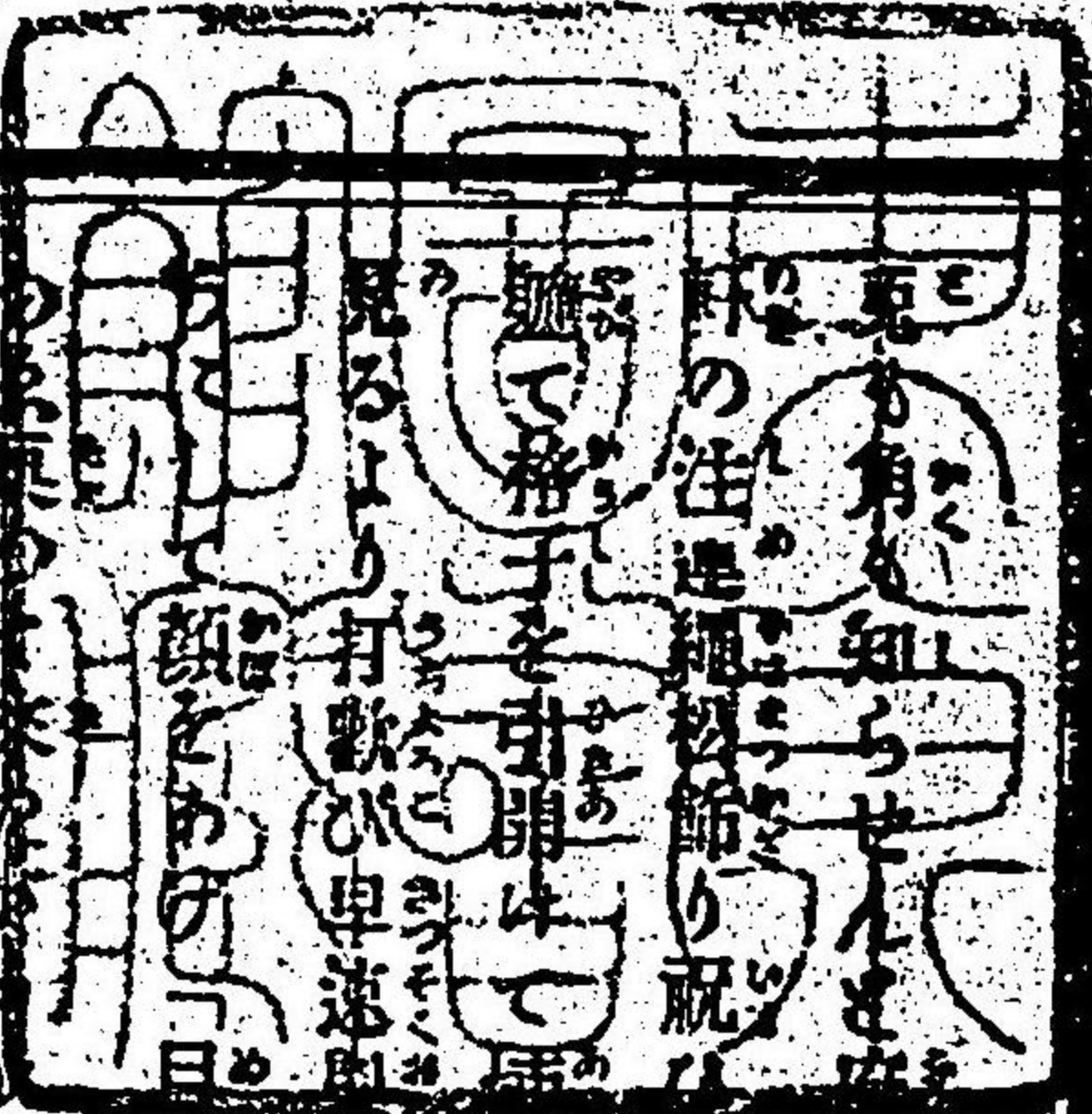
讀岐多度津 一貫社

神戶 弘續社

兎も角も知らせんと庭中に來りて三保の松が住居間近く來て見れば主個の居ねど春の知る
軒の注連繩松飾り祝ひ壽く留主の戸へ計音を報せも心愛けれと言ひで止みなん事ならんぞと
懸て格子を引開けて掃公お宅に在すかど金治が訪ふ聲を聞くよりお濱の誰かと立出て夫と
見るより打撃び早速奥へ連立行き然て親分のと問ひかけられ金次ハ胸の苦しき切なさ漸や
ちとして顔をわけ一日出度尽しの正月早々聞せるも便みければ聞かさにやならぬ事ある
も原の來たが、姉公口情い事を爲やしたと亦々さらに男泣何の事やら分らねど續く
夢見の悪しき折さての所天の身のうへかど有禁の赦さぬ漢なれば膝すり寄せて金治に向か
ひ「若や親分三保の松の「サア小宮井藤三が計略の買に罹つて果敢ない最期と其願末より
自分一人が甲府に滞り索出せし一任一物を物語此上は文吉親分の應援を得て仇を討ん爲め
ばかり耻辱を忍んで歸りやしたと聞くにはおはまの夢かとかかり餘りの事に涙も出です洋然
として居たりしが氣丈の女も堪かねてワツと泣厥正体なく前後不覺に見ゆければ金ハの道
理と勞りながら今使いふても返らぬ縁言唯此上ハ一日も早く親分の戀憤をばらすか何より

交會秘訣

近世文藝全集
交會秘訣
...



夢見の悪しき折さての所天の身のうへかど有繋の敏さお漢なれば膝すり寄せて金治に向か
ひ「若や親分三保の松の「サア小室井藤三が計略の買に罹つて果敢な最期と其顛末より
自分一人が甲府に滞り索出せし一伍一什を物語此上は文吉親分の應援を得て仇を討ん爲り
ばかり耻辱を忍んで歸りやしたと聞くにはまの夢かどばかり餘りの事に涙も出です茫然
として居たりしが氣丈の女も堪かねてワツと泣臥正体なく前後不覺に見ゆければ金次の道
理と勞りながら今更いふても返らぬ線言唯此上の一日も早く親分の體償をはらすが何より

専一涙をどよめて佛檀へ香華を供へ一遍の回向をするが佛の爲めと説諭されて寢に左なり
 と俄に佛事の營みと寝る内外の飾りもの最と賑ひし街さへもの憂さ心地のせられしあるべ
 し期て一七日と経過て後は復讐の念を思ひ立ちしが或日金次りやはまに向ひ何か密々相談
 なし其翌日再度甲府へ出立またるの計もまた如何なる所存なるか

○第二拾六編

或人常盤の前が伏見の里にて雪に惱める圖に題して「降積る身の憂事も常住にかへぬ操や
 雪のひら竹」と詠みたりし夫れにのあらねど降積る雪の街路を埋めつゝ人の往來も絶たる
 中を年の二十と五ツ六ツ超しと思ふ一人の婦人が七歳ばかりの女の兒を連れ菅笠合羽の旅
 装束身輕に打扮引杖を力に歩行を踏なれぬ深雪に惱み漸々ど小室井藤三郎が軒に來りホッ
 ど一息熟々と寒さに堪ず幼兒が凍る動靜を打眺め大人でも堪兼る此大雪のりの中を軟
 弱い和女を無理に歩ませ急かすも貯へ薄き旅の空一日も早ふ在土へと思ふ心ばかりが焦る
 も多無慈悲に宿を連れ出したが厭らし顔とてせず寒さと忍び此母を勞る和女が孝行の疑

しいどや忝けけなれ夫につけても夫の
 薄情思ひ續けて此はどから持病の癩
 が起りしも氣を張つめて辛抱すれば
 つひ雪に閑ぢられて行途苦しさ折るを
 り差込む胸の切なさは平常念じる神佛
 も見放し玉ひしものなるかと思へばな
 ほも差重り激りし淵にウンとばかり空
 と倒れし其動靜と見る幼兒のらろく
 ど切なすや母さすと呼べど叫べど其甲
 斐も嵐と雪にとぢられて餘處にのみ夫と
 聞てゑねど圍爐裡の傍に圍居して酒烟
 めつ雑談に寒さを凌ぐ乾兒等の中に金



即ち江戸までも名の聞こゑたる小室井橋か幼児連て雪道を旅から旅の其中で憂苦に閉ぢられ差起る持柄の癩に翌日をも待たせ今降る雪と俱侶に消えんとせし玉の緒を繋ぎどめたる思あるうへ行途の事までお案じ下され御深切なる其お辭お話すも通かしければ世に薄命な此身の履歴お聞きなされて下よりませと説出せし如何なる説話か汗の次編に解くべし

○第二十八編

登時婦人のせぐり来る涙と拭ひ履憂らせ「何をか匿ませせう元々は江洲彦根の家の中松浦主膳が妻にして名をばお清と喚者にてまた是なるは夫婦の中に奥けしか松といふ娘 夫主膳の定府にて櫻田の本邸に御小性組頭を置ました夕朋友の讒言もあ本守の御不興蒙りて當春似に本氣詰と仰渡され是非もなく断し吾妻の住居を後に末の愛身に近江路へ移り變りし良人が不品行京都の町より彦根迄を移るに於て綾妓に心を奪はれ家にとて寐る夜も稀なる亂行に上への聞こゑと偶々の諫言の反つて耳に悼ひ冗言女の餘計口と恨を機に家を立出我家へとて歸らぬのみか此身に後夫があるなぞ、夢にも知らぬ濡衣を靴袖とてもなすけ

なや何處を見ても他人の中何と詮方なき居るを宜事にして離縁狀渡し夫のみならず女の兒の婦人に思が當然と此お松をも突つけて慈悲用捨もあられなく離別となりし口惜さに人を頼んで潔白と言入させても肯ばころ只一徹なる秋風の此身に立しも絃妓か花の色香に惑はされ終に降来る濡衣を着つ、馴にし良人の傍と別れて一先吾妻へと心志たる道入この甲府に聊かの知己もわれべ立寄て亦協議もあるならんと遙々尋来てみれば目的は早晩なまよみの甲斐の國に在らずと向の綱の斷果しも子供を遣し長旅に時へ來し誓願も盡さ此向向と奈良坂や兒の手拍と二人が身にまた降か、る此大雪行途に迷ひ四五日と只徒らに滞留せし夕漸やく心取直し宿り出ても捨船の寄港活もなす事かと思へば一時に差込む船宿家の庇護にわらざれば此再世のよもあらじ思のほごの甲斐が嶺も我身の爲にはなほ低し九つの世を變るとも争忘れは致ませぬ最が耻かしき長物語さぞや退屈爲玉らん許させ玉へと泣顔をつ、ひに餘る愛敬は雪の中なる紅梅の其花替の年の數三十路に近く見ゆれども天然具る嬌色の寔に此邊に得難き美人と藤三郎の徐々氣に見惚て餘念なき勳止を夫と看とどる

鮎魚金次が涙を咳に紛らしながら「聞けば聞くはど氣の毒な其様薄情な男を持よりの江戸へ歸つてまた立派な婚を捜して嫁入なさいマア何にせよ此雪ヒヤア何處へ何うする事も出来ずへ春になつたら雪解を待ち悠々江戸へ歸るとして夫まで親分を頼んで滞留爲なさいがい、「オ、金次が云通り幸ひ裏の隠居所へ心になく滞留爲て春は誰かに送してやらうホソにお前の御亭主の武士に似ぬ薄情者も断然と絶念眞實のある男とは亭主にするが身の爲だと誘ふ慈愛の魚ルと夫と推りしものなるか婦人も藤三が辭を依に遂に姑く滞留の其下紐の水心は又編に於て解くや如何に先看客の判断を乞ふ

○第二十九編

落花情あらハ流水豈意なからんや小室井藤三は雪に腦やみ婦人を我家に引め置きしが早くも幕延元年の留過きて同二年の春とはなりぬ素より色好なる小室井なり殊には縁の國房淋しく酒に心も浮々と徐ろお清は戀慕の爲たれと察婦とて云へ其以前は武士の女房と聞たる事ゆる容易に挑みて得心せざれば男の耻辱と思ふものから馬を傾みてのを入もの朝

夕眼先に觸るのみか最ど健々最正切さ三度の膳の給仕さへ起居舉動一として心に協はぬ事なきも何卒心に随得せんと密に胸を痛めしよりから斯と察せし鮎魚金次が或日小室井に打對ひ親分も何日か何まで柿公なまでも居られ升まい幸ひ隠居のお清どのの標致と云ひ諸事万事抜けれないには私等も實に感服爲て居やすが過般も長次兄イが恰好アノ人を親分へ媒人してはと云れましたが貴公の方さへ得心ならお清どのには乃公から及ばず乍ら説解し目出度納めて見まするが此相談の何ですと測りに船なる金次の勤めに小室井の打喜こび己も疾うから其事の氣に浮かまぬでいなければも慈愛をかけて滞留させたも標致に惚れ込み女房にそる了簡であつたかと思はれるのも厭だから實の今日まで長久と始め其方へも明して云はなんだかお清が否と云はなけりや己の方では満足だと惚くも承諾したりまゝお力事を吞込み鮎魚の表の方へと出で行しが常夜小室井の金次が返辭の様子如何にと侍處へ荒爾脚にて入来る金次親分貴公の罪の人だ先の疾より其心有馬の根に蔓ひ露の情になり度と眼顔で知らせと通せぬば所詮及ばぬ望ぞと思ひ斷然居りましたに夫の眞實の事ですか

と流石の年増の包藏なく云はれて乃公も親分が今に始めぬ婦人殺しの計に熱心爲やしたが
 斯う何事も早分りじや媒介口もいらぬ方公の此事長次兄に話して何角と用意としやう
 善の急げだコレ親分跡で姉公と否か清くのと呼んで貴公の口から口移しに申掛半分出
 でしが終に當夜小室井はお清の國房へ忍び行き宵に金次へ云つた事が嘘でなければ己か氣
 を安心させてと寄添ふを婦人のいど愧かし氣に土地に益の俠客も似合しからぬ女房役定
 めてお氣には協ふまいが之れも何ぞの縁と思ふて見すて添ふて下さりませと確三の顔を
 秋波にマツト覗られて小室井の精神宛ら騒る如く其ま、手を把り引寄るをりから楓と夜嵐
 の戸の隙間より吹込は燈光の注て眞の闇如何なる夢をや結びけん記者も姑らく筆ガツリ

○第三十編

却説小室井は胸を焦せしお清と枕を列べし事を疾くも金次が推察して病犬長次とも鶴屋の
 うへ吉日を撰び婚禮の式を執行なび玉へと俯むるにぞ聽て表向夫婦の杯盞をなし乾兒の者
 へも之れを披露しお清と更め後妻にいたしましたお清と後女として最と睦ましく暮し居たりぬ

抑々此松浦主膳の妻たりしお清と云へ
 るの何者ぞ前編にも要客の推し玉の
 んど記載たる如く元是駿府に居りし三
 保の松清三郎が未亡人おはまにして斯
 姿を變へ甲州地へ來りし其原を聞くに
 去年鯨魚金次が駿府へ飯り三保の榎が
 横死の状を語し時より何卒して亡夫の
 仇と討取んと思ふ一心より金次と爲と
 相談のうへ同人を再席甲府へ赴かせま
 すく二なら乾兒と小室井に油断とさ
 せ置き其身は焦る心を鎮め當年の暮駿
 河を立て甲府へ來り四五日は或歌屋に



溜所なし密に金次を招きつ、手筈を定め大雪を道具に遣ひ劇場で見た常盤の前から思ひ着
 り旅の婦人と見せかけて首尾よく此家へ入込しも色に事寄せ機わらば仇と報いんおはまが
 所存も其甲斐なくて往らふ始く月日を経過ぐ圖らず金次が策略の的の外さず色好みの藤三
 郎を絞なしつ、終に同人々後妻となりまたも以前に歸り花姉公くと崇られしが素より敏
 き性なれば飽まで武家の女房を崩さぬ万事の取扱ひに誰とてこれを三保の松の女房なり
 しと知る者なく就中て小室井の針ある茨の花どどの争でか心注ぐべき只一筋に其色を愛て
 深くも潮れ居たりぬ茲題小室井が乾見の中に岩崎勘助と云へる白痴漢わりしが元は東京の
 産にて近きころ甲州へ流れ來り素人相撲の小力を頼みに博徒の群に入り候り小室井の宅へ
 食客となりしが性得心懸かしき男なれば離れとて名を呼ぶ者はなくボソボソと云ひ做せ
 しを當人は左まで腹も直す只懸々云ふのみやあ惜まられもせでとりしうちおはまのお清
 の殊更に此勘助を愛しつ、何處へ行も供に連れしに或日甲府へ江戸から來た博多蝶三郎と
 いふ勘助しが興行せしにぞこれを見んとて勘助と連れお清の同處へ赴きつ、終のて歸り其

邊りの茶屋へ上りて酒を命じ勘助と俱に盃の數と重て微酔つ卒歸らんと促せしに何思ひけ
 ん勘助は突と立上りお清の袖をじつと捕へて莞爾と笑ふ動靜は廿五歳の醜男面に宛似た
 る其可笑を押かくしオヤ勘助何をするのだ戲談するなど振はらふ其手をまたも確握り「コ
 レサ姉公イヤサお濃さん其様に眞面目になりなさんなど包ひ我名を呼ばれまの思はせハ
 ット駭きし此段落の如何なるか次編に説分べし

○第三十一編

思ひがけなく以前の名を喚ばれて駭くお清のおはまが立んとしたる番と捕へ勘助の打笑ひ
 「コレ姉公其乾驚の道理じや乃公の貴女が三保の松と江戸に居られた當時から相撲が好
 る兩國へ毎日稽古を見に行うら何時といなしに關取と懸念に多つて二三度の貴女の宅へも
 訪て往たが其後い組の喧嘩の爲め江戸の場所とバ封じられ駿河邊りに居られると人の風説
 に聞いて居るうち乃公も江戸とは喰詰て東海道と京坂筋へ出かけて見たが木に餅の旨は穢
 もない事もあまたぶらくと下り路も是から何を駿河へ來て思ひ出したの關取を訪て身と

が落つけんと動止を聞けば先ごろから甲府へ行れた不在の話を柿公の集々出逢もしねへに然う厚皮な頼みもならずと幸ひ此地の知己を便りにアノ小室井が乾兒となつたが去年貴女が大雪から轉込んだる容貌の確におはす柿公と知れども是に仔細があり想と空吐惚して窺ふうち忘れもしずへ去月二日而も此家で鯨魚金次と貴女が出逢の密々話裏口傳ひに具り聽とり始めて知つた三保の松が非業の最期に驚いた其うへ貴女が色仕掛で謀た良へ小室井と旨く嵌たる魂膽の人知るまいと思ふだらうが此勘繰り知つてゐれど親分へも此事を云ぬの胸に一物のあると云ふのも去年の冬雪に凍れて倒れて居た貴女の身体を緊り抱ひ介抱をした其時に觸つた肌が煩悩の忘れられない我思ひ今日の云ふか明日の夜の闇へ忍んで行かうかと思つて寐ぬ夜も多かつたが親分丈けに小室井が一番鎗を突通し加之に柿公と云ふ様に扱露とまたゆる落膽と心の張も落た折から圖らず聽いた一件を今でも血ぐに親分に告たら貴女の身の勿論金次も活して貰まいと此立聞を書入で是非とも話と云つて下せへ其代に三保の松が女房おはまといふ事の決て他人に洩らしのまな併飽まで得心せず否といふなら

是非がねへ是から直ぐに病大の兄イに告て金次と、もに愛目を見とるがコレ柿公貴女も元が僞侯の女房になつての苦勞人操を破つて小室井の女房になつた上からの其お餘りの汁澤山少しの馳走爲て呉ても跡に支ゆる譯じやあし夫れ其の白い腕に刺刺た小町や比こしいおはまさん一雨降して堅固な此若崎を喜はせ往生させて呉なせへと附まつりて放さねばおはまさん赫と腹の立しがよく思ひ旋らすに今愁ひに強面して若小室井や長次の耳へ我身の素性を告られて亡夫の仇をば報へぬのみか此身、刃の錆とやらならん夫よりの事、これをも色から引入て本望送ぐる其時の援にせんと心を定め故と荒術微笑て「然う何も彼も妾の事を知つてお出の上からの今さら包み藏しもまない如何にも三保の松の女房おはま期打明ていふからににお前の望も偏せませう併妾も此向にお前を便の事ですから一時浮氣の申戯なら假令このま、小室井お殺されるまで得心せねど未始終とも見棄すにお前の添ふてくれる氣かど辭巧みに言ながら膝を崩して勘繰の身にひつたりと寄り添ひしに實に恐ろしく婦人なれかし

尖れる針のあるぞとの知らず、荆棘の花の色と深くも愛る小室井か、眼顔を忍び、金と早晩の契りをせし其婦を喚出せし勘助のまた以前より疾にも知りし清が素性殊に金の料理屋にて語ら巧謀の逐一と立聞きたる事なれば、機を見合ひ清に三寄り先本望を遂げたる後、小道鏡にの不自由のなき様時々借出す計帳のありとの知らず、はまのお清の何處やら扱たる男と幸ひ供に連てい出歩行しが、圖らず此はと異行物と觀に往た歸に寄しは、毎も金次と出會なる梅月といふ小料理屋で白痴と思ひし勘助が身の屈辱をば知るのみか、金次と通せし動止まで隠しうへに否應云はさぬ足を捉らねて口説きしに、有難のいはまも驚かしか、期まで委細身の素性を知りぬいて居る勘助へ今さら彼是云はんより、卑濫れたる此身をば心ならねどまかせて置き、一時の口を塞ぎし後た金次とも相談きたなら能き分別もあるべしと、終に其場へかり枕怪しき夢をむすびしが、素より毒婦の辨舌に籠絡されたる勘助の生涯に、なす歡樂と極し事と思ふゆゑ、夫よりしての折々、果敢る逢ふ瀬となすうちにおはま

の毎々で勘助に身を自由にさす心あらねば、何卒して此愛を攘す、亡夫の仇も難しと、一日小室井が不在と幸ひ密に金次を招き寄せ、實の和郎は是までの包んで置いたが妾の心で何うしてよいやら思量もつかず、只云つて棄ての置かれぬ、大事の前の小事もある和郎の智略を借らねばならぬが、其の仔細の斯くど勘助の事の一伍一什と話せば、金次も驚ろきて「然うした奴どの毫も知らず、今まで白痴だと思つて居たが、人の見かけによらない者だ、お姉公の思ひ切つて能く云ふ事を聞きなすつた夫で兼ての計略を遂ぐるは



必ず近いうちと云ひれておはまも漸々落着き「和郎が定て腹と立て突き放されうと案じたに
然う夢められちやア氣味が悪いが暫時も早く渠奴をば何うか爲ないと往々の兩人に係る一
大事チア其攘除様ハ「コレ斯だど何か私々家語はおはまの點頭莞爾打笑み尙も身を寄せ語
ひ逢ひぬ」今日ハ小室井藤三郎が誕生日とて大勢の乾兒を招き這に家内もいどい混雜の
座敷を抜けておはまのお清の裏の隠居所の戸を開けば内に忍びし一人の男が「姉公か「ア、
コレ合點だ」急に已に逢ひ度からこ、まで来いと先刻の書狀急な用どの何うした譯かど
尋る聲も餘處を憚る可も此男の誰なるか繪様に大方顯し置けば如何なる話のある事にや次
編へ續いて解出さん

○第三十三編

小室井が裏の隠居所へ密に忍びし男といふが同家の乾兒に就いておはまの兼て魚と商議
し事のわりしゆる此處へ勘齋を招き寄せ四下を憚り聲を秘密め「過日かふ榮々と逢ふて話
談がまたいと思へど内外の人眼に隔てられ殊に長次が兩人の中を怪しい位におもつて居

るか毎になら此節ハ朝から晩まで入浸り油斷を爲みい動止があるもる浮架と兩人が舉動を
見せ考づかれてハ大事だど故と和郎に碌々と此四五日の物も云す定めて腹とお立で在うが
下紐解いて寝た時から堅く約束した通りホンの當座の慰みで浮架とするのでないうらハ何
卒兩人が江湖はれて夫婦に成て暮したさ只云て小室井といふ所夫のある身所詮此處でハ添
はれぬとゆゑ二人で通口と實ハ路費の金策まで調達て見たれども他の者どの事變り甲
府で名代の博徒男の面へ泥を塗たど怒り忽ち夫から夫と手と廻されてハ何國の何處へ落着
たどて安心して枕を高く寝れぬ譯そんな窮屈な思ひをするよりどても濡たる身とすて、乘
るか反かの一六勝負世諺にいふ毒喫はばさら思案を變たといふハ何時が何まで知れない
ど油斷するうち小室井に尙し察られて兩人とも重て置て四ツにするど演劇でよく見るさら
れ與三浮雲出逢をせうよりの機を計つて親分を手短く殺害て此跡式を和郎に譲り少し江湖
の風聞を避けた時分に更めて夫婦になつたら誰一人點のうち人もあるまいと妾の決心また
おゆゑ和郎も度胸を定めたら「恰好今夜の酒宴に妾が充分小室井へ備めて酒と飲ました後

正体もあらず酔つて居る處をグツと一と突に何の雜作もあるまいから妾を可愛と思つてなら
 今夜忍んでアノ寐問へハチ其爲機ハコノ斯と勘破が耳に口を添へ何か密々耳語は流石の白
 痴もはじめの程ハ承諾氣色もあらざりしが巧の辯に説つけられ色と慾との二途に名ハ若
 きと堅ければ心曲るかん激が終におはまの言に睡ひなほも合圖を謀しつゝ、表と裏へ立別
 れぬ再説小室井の斯るべき謀の穴に陥るとハ神ならぬ身の争で知るべき今日招きたる乾兒
 等が歸りし後もおはまのお清が俯むる酒を引受く早十二分の酔を發し其場にならぬ倒る
 ゝを轉寢してハ身の毒とおはまの金次に眼配して漸やく小室井を抱き起し總て臥床へ伴ひ
 來り夜衣を着せて蒲團のうへこれぞ未來の遺棄となる鐘も早子の刻なりけり

○第三十四編

往古より和漢洋を問はず英雄豪傑といへども色界の迷津に溺れて其身をわやまり太甚しき
 ハ天下を亡すに至る況てや道々學ばず教を受ざる横行我威以て自ら侯客と稱ふる野蠻氣味
 の徒に於てをや細前章小室井藤三郎ハ現在俺が斬殺せし三保の松の女房おはまなりとの毫

も知らでお清が色香に春戀せしより遂に後妻となしたるハ恰も刃を抱て寐る處に風前の燈
 火とい此れ等の事といふなるべきかお濱の素より一心に三保の松の怨と報ぜんとの深き謀
 のある事なれば巧言令色縦まゝに小室井が精神を蕩かし金次と密かに計議しうへにて
 藏と玉に使ひ其本望を遂げんものと誕生祝に過でしたる酒に正体なき所夫を漸やく寢室
 へ誘ひ行き床に臥さしめ其身も俱に同枕に就きながら眠りもやらて窺ふ折から他の乾兒
 ハ表の室にて前後も白川夜船漕ぐ舳の聲のみ高かりしが誰どの知らず次の問（ミシリ）
 と忍び來る足音すると合圖と見ぬお濱の密と床と脱け出で傍の火鉢の抽斗より拿出したる
 剃刀のねた刃のかねて合せしか逆手に持つて熟睡せし藤三郎が枕邊かくへ自持ながら胸元
 を堅く押へて氣色を變へ○劔の山の刃渡りの夢を見るか知らねへが十萬億土へ旅の引
 導代りに聽いて償な今まで嬉しい可愛と抱けて締た此腕の具方々命と縮る機軸三國一の富士
 が根で人に誦られた三保の松と男に似合す身法にも欺し撃にした報ハ靦面其女房のおはま
 が手で寐首を取るから嚙言になど念佛申て往生しなど云つゝ、剃刀取直し咽喉と深く掻き切

し灸所の痛手にアツと駭き眼を開けりこの
 体なるにぞ素より剛氣の小室井の何小恙な
 と刎ね起きて脚にてお濱とハッぞ蹴倒し床
 なる刀を取らんとする此時屏風の陰よりし
 て跳り出たる勘藏が携へ持し刀を隠し小室
 井が背より腰へ掛け力まかせに切つけし再
 度の痛痕に昂ぞ堪らん流石氣丈の藤三郎も
 無念くと云ふながら堂と其ま、倒る、處を
 透さず兩人の立寄て遂に息の根どいめしが
 當ころの宵のほよりししの雨となり宛
 がら盆を覆せま如く縁を亂して降出せしゆ
 る斯る騒ぎも内外の者が絶てまるよしおら



さればお濱のハツと一息吐き「勘さん思ひの外脆く往たす〜」然も吾も心配為たはどでも
 なかつた併死骸の何うする氣だぞ尋る折から次の室から不義者見認た動くなど腰かけられ
 て兩人のハツと驚き立騒ぐ此場の後談の次編に説くべし

○第三拾五編

思ひがけあくる際ての室より不義者認た動くなど腰を掛つ、立出るの別人ならず鮮金入な
 れば驚きながらも勘藏の飛で火に入る夏の虫汝も親分と一緒に行けど切て掛ると丁どうけ
 拂ふ太刀先直ぐにつけ入左の肩先切下ぐればアツと云さす兵兵處とおはまの透さす立寄て
 所夫の敵と勘藏が横腹グサと突切たる急所に堪らず倒れふすを乗しか、つて止めの刀此時
 金次が大聲に騒ぎ立てしに乾兒の者も始て變事と心注き各自其場へ駈つけて看れば小室井
 岩崎が死骸のあるる仰天して早速長次方へ人を走らせ喚寄せしに全体今夜の爲体の何うし
 た譯かと尋られお濱の故と聲曇らせ「先ころから勘藏が妾をとらへて鬼や斯うと責めまつ
 はる横懸幕面耻か、して戒めたる性懲りなくまた昨夜酒宴の騒ぎを幸ひに既に手込りにせ

人動静も酒の科よと体よく流し親分へ其事を告たを何うして知つたやら恨重なる小室井夫
 婦覺期をせよと跳り込み酒に酔臥正体なき所夫の寐込みを刺したうへ妻を切らんとする折
 から其騒ぎをば聞、つけて金次が此場へ斬つたゆゑ直ぐに敵の取りましたが鬼でも怖れ
 の親分が酒ゆる斯んな奴の爲めに果敢ない最期でありましたと己が鬼の眼にたもつ涙もそ
 らの雨車金次も前へす、み出で勘藏の野郎の平常からヌケと思つて油断をすれバ怖公へ怒
 慕をするのみが親分までも殺さうと斯んな騒ぎを仕出かしたも比喩もいふ白痴はど怖い
 ものなき今夜の仕置座敷の騒ぎが耳に立ち驚した痴話とい思ひれぬと親分に來て飛込んだ
 のまだしも姉公の運のよさ唯いとしひの親分が非業の最期でありますと包む悪事の袖裏に
 拭ふ涙ぞ不敵なれ斯て長次の今夜の事を深くも秘置乾兒の者へも口留をして病死と披露し
 法の如く葬送を誓みしが難かつて此事のいはまど金次が奸策に出しものど知らされバ雨
 人の思ふまゝ、に三保の松が敵を打おはせたりと喜びしに邪の道ハ蛇病犬が疾くより夫れど
 察するより遂にお波が悪事露顯進々佳境の物語の編を並いで記載すべし

○第三十六編

斯て小室井の乾兒等の當夜の騒ぎを誰あつてお波のお清と鮫魚が謀合せし仇打と知らねば
 お清が云つたる通り勘藏が懸幕より起りしものと思ふにぞ當の敵とば切棄てし金次の功を
 賞賛し病犬長次が前に立つて此越さるを町役人へ訴へ出で檢視も濟みて事もなく小室井の葬
 式ハ執行ひしが此相續人の甲乙と乾兒一同協議きたるに平常人望もあり殊にまた小室井が
 片腕とも頼みし事なれば病犬長次を二代目の小室と推薦せしゆゑ金次の胸の目算外れ面
 白からず思ふものから或日お濱に向ひていふ様「豫て二人が望の通り三保の松親分の敵を
 討たうへからの最早此甲府に用ひるし併姉公と己の中と今さら駿府の文吉親分へ云ひ出す
 も極りが悪く寧私に故郷の名古屋へ二人連にて出かけ行き一花咲す分別がが前も共に
 往つてくんなど怨憑る辭を否とも云ひ兼ね妾も何日まで當地に居て後家の操を立てるとい
 ふ野暮な心いなる事ゆる機を見合せ脱け出さうと約束なして別しに是より前病犬長次が如
 何にも小室井が横死の状の不審とい思へども現在勘藏が其場にて切殺されたる爲体の全く

小室井を欺し打にせし様に見ゆるゆる半信半疑に思ふうち其身の乾兒の推めに藤三郎が跡に直り親分くと崇られるより慾に限りなき病犬が何卒してお清を口説き落さんと密に胸の焦せども袖襖曳いて列られての折角爰まで漕つけた身体へ錆と生すも同じと眼先にちらつく花ながら高嶺に咲し心地なりしが鬘を剃らんと或日お清の鏡蓋の抽斗より何心なく取り出せし剃刀の血を拭ぐのすして納れしものか刃先の少しこぼれし正しく人体を切たるものと知つたるゆる長次といと不思議におもひ須臾考ゆる居たりしが何か心に黙頭て其剃刀を懐中に納め當夜金次をはじめ他の乾兒の近在の賭場へ赴き其身も共に行くべきを心地悪しと斷りて人なき頃を窺ひつ小室井の宅に至りお清が獨り火鉢に憑り人情本の拾ひよみ心仇めく折こそよしと姉公今夜の淋しからうと入来る長次の姿を見るより「オヤ長次さん今時分に何處へ往つた歸りです」「何處へも往きのまやせぬが私や今夜姉公に少し頼みがあつて来やしたと胸に一物有明灯燈を側に押やりお清が傍へ身をすりよせたる後の話の次編に説分べし

○第三十七編

長次が舉動の不審ければおはまの其場を立たんとする袂を堅と引とらへ「今夜の小村で素人が小皿の賭場を開く故金次をはじめ他の奴を先へ遣つたが私だけ病氣と云つて外したも姉公へ頼みがあるから雪に惱んで轉げ込み小室井親分の鼻毛と算へ場なれた床の魂燈で遷々宅へ居直つた怖い彦根の御新造様併し作者が脚色の通り露より脆く親分が往生されたの勿怪の幸ひ何と見込か二代目の親分様になつてからの戀しくなつたお前の胸喧嘩と来チャアおくれをとりチへ病犬長次が首玉を緊かり締めて可愛いと一言云つて貰つたら假令死んでも恨みはねへ頼みといふり此の事だ位牌へすむとか辨ねへとか古代な野痴の云ツコなしにツンと云つて下せへとまつはり着し鬼罵の振り放さんと思へども一筋縄で行くまじと故と辭に角たてて「酒の樽嫌かまらなまが長次さんの申慮なまも親分お別れてから便りに思ふにお前一人疾うから斯うと打わけて話をまやうと思つたが他の人どの異かばり多の乾兒の其中でも常から頼みに親分がお前を腕とも兩足とも力になつて居なすつたに如何に妾

に便りなく相談相人がないと云つてもお前と訝な事があつて江州の人や乾兒の衆へ妻の
勿論二代目の親分様になつたお前が濟ない様に思ふので願念やうと思つたが忍び目見
る顔もある獨り苦勞としてゐるを夫と察して異見にかへ妻が心を引いて見やうと其申儀の向
後を懐き妻の胸に釘其深切のうけましたと寄らず隣らず刺つけるを此方もさる者ビツとも
せず「コウ姉公左様白ばくれて出られて見りやア此方も素直で道理だと引わけかねる此場
の仕置是非得心して貰へ其代りに二世うけて他の婦人を抱ぬと云ふ中だてに此長次の坊
主に成て誓をする夫も姉公の手とかりて此刺刀でまてはしいと懐中さぐり取り出すのは
まが義に小室井を殺せし時に血も扱はず絞めて匿し品なれば一目見るより駭ろく舉動をさ
ころと片類に荒瀬打笑み「此種刃の刃を渡る危い中と動もせず位牌へ向ひ念佛の外面如
薩普内心如夜父鬼の女房に相應な長次か惹きのこの事だ物敷云はずにヤンと云へば此刺
刀の血をあらひもどの白刃に研ぎあげて両刃もまるく後の患も私が胸にあはすから是は
思ふ心底男入望なくせずに暖り方其肉蒲團を貸しなせへと引よせられて灰石のお漢も包ひ

素性を知られしか但しはおはまどまらずとも此刺刀を持出すのの小室井を殺せし事を覺り
しものどおぼれば口どめがはりに身と委せ兼て金次に約束通り常地を通ぐるに如くあり
しと終に長次に仇まくら結ぶ假寐が度重なり其交情の密な入より金次が夫と察したる後の
話説の次編に説へし

○第三十八編

西洋の謠言に云へるあり奸姪一度おかせば終身の淫婦になると宜なる哉彼のお漢の最初小
柳の恩義を忘れ三保の松と密通し終に駿河へ流れ來り女に似氣なく賭事と好み姉公くど
呼ばる、を此上なき榮譽と思ひしに圖らず三保の松の小室井の爲めに縊死せしより其怨を
ば報いんと丈夫に思ひ定めつ、色に事奇勘藏を謀ひ宛も豪邁なりし小室井と刺殺したるの
みならず勘藏までも亡ものとして後の患を除きしは是れ金次の商議なればお漢が胸の
男勝り女丈夫どもまた云はまくのと然と一度貞操と破り貞操を立てしに似たりやうに
通する其うへにまたもや長次と仇枕度かさなれば今のしも金次の事の打忘れ日夜長次と娛

ひ動靜を他の乾兒のこれを幸ひ更めてお清師公を長次親分と配偶さす此様人の鯉魚に空か
すがいと相談せしに左なきに此はとより長次とお濱の其中を知つたるゆゑと一し
ひ其薄情を恨しに彼の剃刀の一事から餘儀なく此身のまりしたが心の底の帯紐の決して解
かぬと辨解にさて然言譯なるかど一時八損をまつめて見たれと素よりこれの一時通がれ
なほはまの通辭であるものから漸次に金次を疎みはて後の碌々辭さへかはさぬやうに不
たるにぞ金次の太く直腹せし折から乾兒の甲乙がおはまを長次へ媒介しると云はれてい
く口惜けれと夫れと云れぬ以前の奸通故と陽に承諾置き或日長次の居ないを幸ひおはま
に向ひて腹巻りな其薄情をうらめども此方の空吹く風にひとしく成ほとお前と其な約束を
した事もあつたが夫れ此方に大望を抱て居たる間だけモウ一件の指も明ばお前に少も用い
ない殊に名古屋へ行處が寄る影もないお前の軀体其様人を目的にして何處へ出かけて行
かれうぞ夫れ万事を明し末の末まで見すてぬと約束した長次さんと妻の夫婦になる代だ
からお氣の毒だがお前もまた他に情婦でもござつてお出で此御時節に女一人を守つて居る